

平成29年(2017年)4月6日(木曜日)

「言葉の力」信じ思索

大岡信さん 「機械化」社会に警鐘

評伝

日本ペンクラブ元会長で文化勲章受章者の大岡信(おおおか・まこと)さん(三島市出身)が5日、86歳で生涯を閉じた。詩作や評論活動を通じた多彩な活動の原動力は、機械が発達した現代社会への違和感であり、時空を超えて人間の感動を伝える「言葉の持続性」への敬意にほかならなかった。

日本文学の舞台として、ずおか世界翻訳コンク1回からドナルド・キ文学の魅力を発信する。伊豆にちなみ、静「ル」(2009年終)ン氏らと中心的に携ととも、優れた翻訳岡県などが開いた「し」に1997年の第わった。県内から日本者の発掘に尽力。その



2005年11月、しずおか連詩の会初日に出来上がった連詩を巻物に書き写す大岡信さん(左)と静岡市内

年から始まった「しずおか連詩の会」も同様だった。連歌師の宗祇が大きな足跡を残した本県ならではの試みは昨年17回を数え、言葉を編む共同作業を「自分と他者との多様な異質性の発見」「未知の者同士の接触と相互理解の探求」と定義した。

豊かな感受性に彩られた現代詩の創作と、日本の古典文学を斬新な視点で再評価した評論を多く残し、「詩と批評は車の両輪」が持論だった。コンピュータ中心社会への違和感を「言葉の植民地化」と指摘し、「最近の機械の在り方は人間のおもしろさをとらえていない」と厳しかった。自分は小さな存在で、

大岡信さんが編んだ言葉

この夕海べの岩に身をもたれ。ゆるくながれるしほの香に夕の諧調は海をすべり。(1947年ごろ、沼津の浜辺から)

夜ふけ洗面器の水を流す
地中の管をおもむろに移り
遠ざかってゆく澄んだ響き

(1960年代、日常を書く)

坊さんは屏風を抜け出て天竺に逐電した

(2007年、「しずおか連詩の会」の詩に言葉遊び)

そして生み落とす、
言葉の収穫祭への捧げものを。

(2009年、「しずおか連詩の会」に第1編を寄せて)